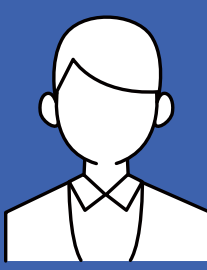
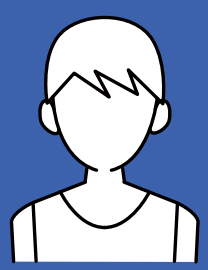
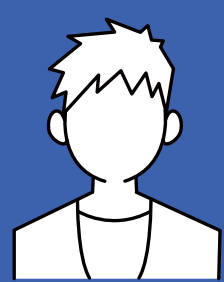
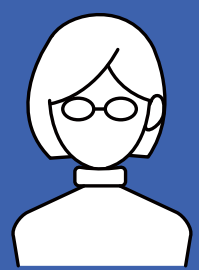
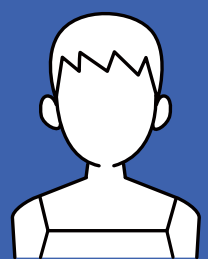
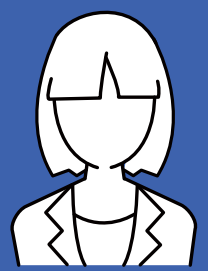
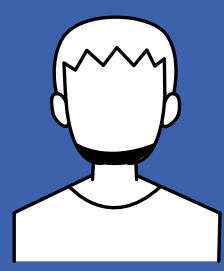
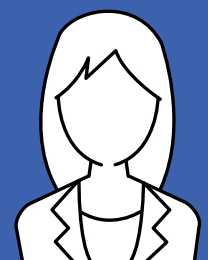
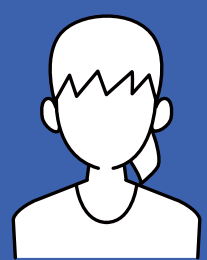
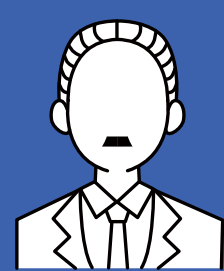
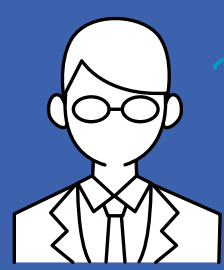
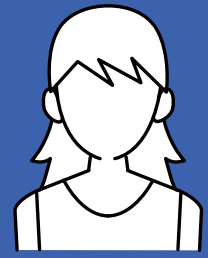
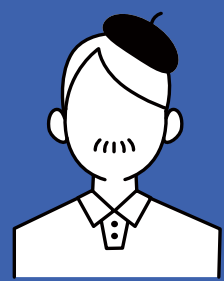


「日本のプロボノ元年」と言われる2010年から10年。プロボノは、社会人の「参加のハードル」を下げ、新たな活動プログラムを生み、市民団体を支えてきた。
プロボノ参加者と、市民団体側の取り組み。共に増えて活動が充実し、社会人ボランティアの力が社会に生かされることを願う。

Pro Bono Publico

[特集]

専門性を生かす社会貢献、 プロボノ——社会人の「参加」の入り口



【特集チーム】中川 智子、河井 靖子、永井 美佳、早瀬 昇、堀 久仁子、増田 宏幸、百瀬 真友美

体験から見えた プロボノの魅力と意義



2019年春神戸ソーシャルブリッジ最終日。
NPO法人ふぉーらいふの皆さん(前列)と、プロボノチーム

神戸市が主催する「神戸ソーシャルブリッジ」2019年春のプロジェクトに参加した。

「神戸ソーシャルブリッジ」は、神戸市内のNPO・地域活動団体と、企業の社員、行政職員、シニアなど社会貢献活動を希望する多様な人材をつなぎ、地域社会の課題解決に協働して取り組む、「マッチング型」のプロボノプログラムである。19年春は、48人の社会人たちが2カ月間、チームにわかれて、業務改善や情報発信など8団体の課題解決を支援した。

社会貢献をしたい、NPO・地域活動団体の役に立ちたいと考える社会人は少なくないが、単独で見ず知らずの団体の扉をたたくのはハードルが高いと感じる。筆者もその一人だ。自分が何の役に立つのかわからないし、温かく迎えてくれるかどうかもわからない。マッチング型のプロボノプログラムは、そんな社会人と団体をつないでくれる。

初めて会う人たちとチームを組みプロジェクト開始

「神戸ソーシャルブリッジ」に参加するには、説明会に参加しプロボノ登録を済ませ、ウェブサイトに掲載された団体支援プロジェクトの中から、自分が参加したいものを第3希望まで選んで申し込む。事務局が申し込み者の中からチームを編成し、そのチームで、プロジェクト内容に沿って団体を支援する。

筆者も5月、ウェブサイトを何度も見比べて、子どもに関わる団体三つを選んだ。待つこと2週間、事務局から「フリースクール運営団体ふぉーらいふを支援するチームに決定」との連絡が来る。プロジェクト内容は、団体パンフレットのリニューアル作成で、チームは5人。6月初旬にキックオフミーティング、7月初旬に中間提案、8月初旬に

最終提案というスケジュールだ。「チームメンバーはどんな人たちだろう、どんなプロジェクトになるんだろう」と期待と不安が入り混じった心持ちでキックオフミーティングの日を迎える。チームメンバーとも団体とも、キックオフミーティングが初顔合わせであり、そこから2カ月間のプロジェクトが始まった。

魅力は「異文化」との出会い

社会人が感じるプロボノの魅力はいくつもあるが、私にとつて最も大きかったのは、異なる日常を持つ人たちとの出会いである。営利組織で働く人が非営利組織を運営する人に出会う、それ自体が非日常の異文化体験だ。

プロジェクトは、団体を理解するための、代表者やスタッフへのヒアリングから始まる。ふぉーらいふの代表者は20年以上前に自宅を開放してフリースクールを始めたという。子どもが持つ可能性を信じ、一人ひとりのために何ができるかを考えながら、地域の理解と協力を得、学校との信頼関係を築き、500人を超える児童・生徒を支えてきた。この団体の価値を確実に伝えるパンフレット案を作成したい。実績に裏打ちされた代表者の強い意志に触れたことが、自分と

チームを動かす力となった。

チームでの協働も異文化体験の連続である。使う用語も、仕事の進め方もまったく違う他社・他業種の人と協働する中で、異なる常識、異なる発想、多様な課題解決手法を知り、さまざまな気づきが生まれてくる。自分の常識を見直し、自分のやり方を見つめなおす成長の機会となり、それは本業にも生きる。

「外」の視点が団体の 思いをカタチに

ブリッジ最終日、プロボノチームからの最終提案を受けた後、プロボノを受け入れた8団体はそれぞれ「神戸ソーシャルブリッジを一言でいうと」を発表した。

ある団体は「目から鱗うろこぼろぼろ」だと答えた。代表者は、「たくさんアイデアや情報がもらえ、気づき・学びがあった。それを組織で共有すると、メンバーの意識も高まり、循環が生まれた。本当に感謝の気持ちでいっぱい」と語った。

ふおーらいふは「想おもいがカタチになる」と表現した。「団体に寄り添い、理解してくれることにより、目標を実現してくれる。いままでこうだったらいいなあと漠然と考えていたものが、外の視点、外の意見をもらうことで、団体内部の意

見も固まり、形にすることができた」

8団体それぞれが語る言葉を聞きながら、筆者は、プロボノチームとの協働が団体内部を刺激し、さまざまな気づきをもたらしたことを感じた。団体とプロボノチームが目標を共有し、お互いの価値観を尊重しながら取り組んだこの2カ月で、団体は、単なる「お金のかからない人手」ではない、異なる視点やスキルを目標達成のために提供する「仲間」を得たのではないか。またプロボノチームは、団体の活動への理解と尊敬、活動の一助になれた達成感を得たのだと思う。それらはきつと、次の協働へとつながっていくだろう。

私はこの経験から、プロボノが、

① ソーシャルな活動に関わる社会人のハードルを低くし、入り口の役割を果たしている

② 課題を抱える団体にとって、社会人の視点・スキルが「今までなかった視点」「新しいアイデア」として機能している

ことを実感した。ぜひこれを、課題を抱える団体と、支援したいと思う社会人双方に伝えたいと思い、本特集を企画した。プロボノが参加・活動しやすいプログラムや環境を考えたい。

編集委員 中川 智子

「プロボノ」って？

「プロボノ」とは、ラテン語のPro Bono Publico (=For good Public: 公共善のために)を語源とすることばで、ビジネスで培った経験やスキルを生かして取り組む社会貢献活動のことを指す。弁護士が社会的弱者の法律相談に乗ったり、医師が海外の医療支援にボランティアで参加したり、企業で経営戦略、マーケティング、IT、営業、人事、経理等の各部門で活躍するビジネスパーソンがNPOの事業計画立案や情報発信ツールの制作を支援したりするなど、プロボノにはさまざまな形がある。

日本では、2010年が「プロボノ元年」と呼ばれ、以来、プロボノに対する認知や関心が高まり、参加者も広がりを見せている。

認定NPO法人サービスグラント 堀 久仁子

プロボノコーディネーションの3類型

プロボノとして活動に参加する、あるいは団体がプロボノを受け入れる形態には、どのようなものがあるだろうか。

まず、仲介機関が入って活動希望者と活動先の団体をつなぐタイプがある。本特集チームに参加いただいたサービスグラントは、このタイプの第一人者であり、プロボノコーディネーションの専門機関である。

次に、同じく仲介機関だが、社会福祉協議会や市民活動センターなど、プロボノ専門ではない機関が介在するタイプがある。最後に、仲介機関を介さず、団体が直接プロボノを受け入れるタイプもある。

大きく分けるとこのような3タイプといえよう。「人が団体に活動する」という点は同じだが、つなぐ仕組みや活動を支える仕組みには、各機関の工夫が積み重ねられている。

編集部

Vol.109 「8050問題」って?

うおろ君の
気にな〜る
セミナー



まんが ■ラッキー植松



1980年代から90年代にかけて顕在化した青少年の引きこもりが長期化し、本人が40〜50代、親が70〜80代になつてより深刻化している問題。近年になつて、高齢化した引きこもりの子どもとその親が生活に困窮して亡くなつてしまふ出来事などが相次ぎ、この問題に対して社会の目が注がれるようになってくる。

2019年3月に内閣府がおこなった40〜64歳を対象とした初めての引きこもり実態調査で、この年齢層の引きこもり者は61万3千人という結果が出ている。

実は、この8050問題は、引きこもりの人たちだけではなく、障害者、特に知的障害者や精神障害者の問題でもあり、障害者運動の重要課題ともされている。

この問題への対策はまだ始まったばかりと言えるが、現在でも、全国に75カ所設置されている(19年3月現在)「ひきこもり地域支援センター」や、自治体の「生活困窮者支援窓口」等で支援が受けられるようにはなっている。ただ、これらの機関が十分機能していないことが大きな課題とされている。

編集委員 牧口明

ウォロ2年分(12冊)を挟み込めるバインダー(1冊500円+送料350円)です。お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで

「ISまちライブラリー」

7 50カ所ほどに広がる「まちライブラリー」生誕の地――縄の水上家からきた本の会」で

「提唱者」である磯井純充さんを訪ねた。大阪の中心部、上町台地に位置する「ISまちライブラリー」の原型が生まれたのは2008年。現在、約8000冊の蔵書があり、読み聞かせを楽しむ親子からシニア世代、同じビルにあるオフィスで働く人など多くの人が利用し、イベントも行われている。月に1度の「本とお茶の日」には、お菓子を楽しみながら今読



「まちライブラリー」提唱者の磯井純充さん

ISまちライブラリー

大阪市中央区内平野町2-1-2 アイエスビル
(地下鉄谷町線天満橋駅徒歩5分)
電話 06-6809-3152
開館時間 月曜14:00~21:00
火・水・金曜10:00~18:00
木曜10:00~21:00
土曜10:00~17:00

<https://is-library.jp/>



は沖縄にまつわる本や話題が集まる。また通常のライブラリーやイベント利用以外に最低3時間からの部屋貸しが可能で、地域の会合に定期利用されているとのこと。

「ここは、いい感じに乗っ取られちゃってるからね(笑)。自分の生まれ育った場所だし本籍もここだけど、使う人がやりやすいように運営してくれている」と話す磯井さん。聞けば、各地の「まちライブラリー」に赴き、提唱者として、思い思いに活動する人たちとの出会いを楽しんでいると言う。実際にそこを使う人たちがプレーヤーとなつて運営しないと場づくりは成功しない……そんな哲学は、企業人としてビジネス最先端の地、六本木で活躍していた時に身につけたものではなく、第一線を退いたあとに旅した太平洋に面した小さな町で「小さな図書館をやってみたい」と口に出したときに芽吹いた。

人の集う小ぶりの図書館として仕組みを整えた「まちライブラリー」は、企業の考える「採算がとれて影響力のあること」ではなく、人が「おもしろいね、やってみたい」と思えることへのソフトチェンジを決意した磯井さんの傑作だ。

取材・執筆 宮村佳子



災害・支援・ケアの社会学 地域保健とジェンダーの視点から

板倉有紀著
生活書院、2018年11月
本体3800円+税

1995年の阪神・淡路大震災以降の日本社会で、徐々に組織化が進みながらいまだ課題が山積している「被災者」への支援・ケアについての社会学的考察を示す一冊だ。ジェンダー論と地域保健の視点から論じる点に特徴がある。

本書の重要な概念の「ヴァルネラビリティ」は、一般に、「傷つきやすさ」「脆弱性」を意味し、災害支援では「災害時要援護者」とされる高齢者、障害者、乳幼児、妊婦、傷病者、日本語の不自由な外国人などが、これをもつとされる。しかし著者は特定の属性に沿った一般化に異を唱える。被災時にはこれらの属性が他の要素と

重なり合い、複合的に機能することが普通だからだ。

加えて「女性であること」は、見落されがちなヴァルネラブルだと著者はいう。発災初期の生活において、衛生上の困難や性暴力被害の危険が女性に集中することがよく認知されてきたが、それにとどまらず、女性は賃労働の機会からも排除されがちだ。発災時から生活再建期の長きにわたり、他者のケアの担い手として期待され、決して多くはない新たな仕事は男性に優先的に割り振られるからだ。

「女性」という属性は基盤的要素のひとつであり、他の要素との複合で支援ニーズはさら

に重く、複雑化する。それゆえ支援の構築には、個々人が置かれた状況についての丁寧な情報収集と適切なアセスメントが欠かせない。著者は、東日本大震災時における保健師たちの活動実績に注目し、平常時から地域住民の心身に関する状況把握を職務とするこの専門職がもつ経験と知恵、つながりを、災害時支援ネットワークの基盤として高く評価する。

防ぐことが難しい自然災害ゆえ、その後の支援体制の構築が問われるが、それは急には作れない。平時からの「社会の質」こそが問われることを教えられる一冊だ。

編集委員 工藤 宏司

～市民視点のドキュメンタリー映画を紹介する

今回は、ちよっと毛色の違う一作を。2015年に東京の小さな博物館で、葛飾北斎、喜多川歌麿、菱川師宣などの国内外に残る貴重な作品約120点を紹介した、日本初の本格的な春画展が開催された。「春画」とは、江戸時代に流行した、男女の性的な営みを描いた肉筆画や版画だ。年間来場者2万人ほどの小さな博物館に、同展だけで21万人の観客が押し寄せ、高価な図録が飛ぶように売れるなど、美術界の「大事件」となった。

13年に大英博物館で初開催され大成功を収めた同展は、日本の公私立20館あまりに断られてしまふ。理由は「春画」だから。この映画は、日本での開催実現のため奮闘した美術関係者の姿を描きながら、臆することなく作品そのものを見せている。私が映画で初めて目にした春画。男性器、女性器も大らかに描いてあり、最初はびっくりにしたが、すぐにその美しさに瞠目した。柔らかな美しい線、豊かな色彩、ユニークで大胆な構図。版画は当時の摺りや彫りの最高技術を見ることが出来る。庶民の文化だったが大名がスポンサーになり、大名家には数々の春画があったという。縁起物にもなっていたというから面白い。性は生、生きることの象徴でもあったようだ。豊穡を祈るおまじないや、嫁入り道具に持たせたりもしたよう、当時の人々の性への感覚は、なんと明るく大らかだったのだろう。

さて現代の日本。「(春画展は)素晴らしい、日本に来たらぜひ見たい」と称賛する美術館関係者だが、自館での開催は断る。「女性客からクレームが来ちゃうよ」「公然と罪にならないうか？」などと躊躇してしまうのだ。「わいせつ」という言葉を春画と結び付けて、見えない亡霊に怯えているようだ」という研究者の言葉が印象に残った。

最近頻りに耳にする「忖度」。見えないものに怯える自己規制で、私たちの目に触れないものがあるならば、なんと残念なことだろうか。



今月の作品「文化記録映画 春画と日本人」

©大増敦
※春画に修正をかけることを避けるため、映画は18歳未満入場禁止で上映しています。

監督・撮影・編集・製作著作：大増敦
宣伝・配給：ヴィジュアルフォークロア
2018年 | 87分 | 日本 | ドキュメンタリー
キネマ旬報ベストテン2018年文化映画第7位
上映情報は <https://www.shungamovie.com/showtimes>
全国公開後、自主上映募集予定

●今月の館主



おおがねく よしみ
大兼久 由美
イラスト：杉浦 健
1960年沖縄県生まれ。柴田昌平監督作品のプロデューサー、配給を行う。長編記録映画『ひめゆり』(2007)は6月の「沖縄慰霊の日」にちなみ東京のポレポレ東中野で毎年6月に上映を続けている。『森聞き』『千年の一滴』を含め自主上映を募集中。問合せ：プロダクション・エイシア (電話042-497-6975)



ソーシャルアクション!
あなたが社会を変えよう!
はじめの一步を踏み出すための入門書
木下大生 / 鴻巣麻里香編著
ミネルヴァ書房、2019年9月
本体2400円+税

本書は、社会の矛盾や不合理、不寛容さに対して、社会を変えた／変えようとした人たちの経験を共有し、ソーシャルアクションの方法を整理することで、「声をあげよう」とする気持ちを引き出し、また社会を変える後押しをすることを目的としている。

本書の特徴は①さまざまな領域・バックグラウンドを持った人のソーシャルアクションの経験がつつられていること、②直接的にアクションを起こした「社会を動かした人」の経験と、間接的に関わる「動かす人を支えた」経験という二つの枠組みからソーシャルアクションのストーリーが集められていること、③

領域やバックグラウンド、関わり方の異なる実践者がアクションを行う動機を「私は」で始まる物語(＝当事者力)にして経験が集められていること、の3点である。

「このままの社会でいいのだろうか?」と疑問を持ち、「このままではいけない」から「なら、こうしよう」と行動に移すことがソーシャルアクションである(4ページ)。しかし、社会を変えるための一步を踏み出すにはそれなりのハードルがある。「当事者でない」と「明確な目的がないと」アクションが起こせないのではという疑問に対しては、本書が提示する「当事者力」や「ソーシャルアクション

を支える」という視点がヒントを与えてくれる。

明瞭で他者の心を打つような動機でなく、「なんとなく」や偶然の出会いも十分な動機であり、社会を動かすリーダーシップとそれを支えるフォローアップからソーシャルアクションを考えることの重要性を本書は気づかせてくれる。「社会を変える」のはオオコトである一方で、「私は」で始まる物語をそれぞれが語り、共感が折り重なることで、人々が動き、動かされる。ソーシャルアクションはその繰り返しから生まれるものであることを実践者たちの経験が教えてくれる。

編集委員 竹内 友章